

## 国境を越えた人間讃歌

一本橋成一写真展によせて一

三木 健

1960年代のいわゆる「エネルギー革命」で石炭産業が没落し、炭坑労働者が大量解雇された九州の筑豊に、一人の青年がカメラを手にやって来た。青年はその頃発売された土門拳の写真集『筑豊の子どもたち』や、筑豊の記録作家・上野英信の『追われゆく坑夫たち』を読み、それに触発されていた。写真専門学校卒業を間近に控えていた本橋成一である。

その頃、筑豊の廃屋となった炭住を買い取り、「筑豊文庫」を妻の晴子と共に立ち上げた上野英信は、自ら「筑豊案内人」と称して、取材に訪れる人たちを進んで案内した。本橋もその世話になるが、多くの取材人が一過性に終わるのに対し、彼は何度も足を運び、坑夫たちと向き合い、自らの足で取材するようになる。上野はそうした彼の取材態度に心打たれる。上野は常日頃「記録文学を志す者は、時間を惜しむな、金を惜しむな、命を惜しむな」と言い続けていた。上野のこうした姿勢を、本橋は己のものとして生きる覚悟を決めたに違いない。その後、私も西表炭坑のことで筑豊文庫に上野を訪ねるが、本橋とはその頃から知り合うことになる。

本橋はその後、多くの坑夫を九州の産炭地の送り出している与論島を訪ね、あるいは東北地方から出稼ぎにきた人たちの交差する上野駅や、サーカス、あるいは屠場、画家の丸木夫妻などを取材。さらにチェリノブイリ原発事故後のベラルーシの汚染地域に生きる村人を取材する。その民衆を捉える確かな目は、筑豊以来、変わることがない。

社会派といえ、とかくコブシを振り上げる労働者に焦点が当てられがちだが、本橋は徹底して生活に目を向け、そこに生きる人間を浮かび上がらせている。そして時にはもの悲しく、時には力強く、彼の写真に向き合う私たちを引き込んでいく。原発取材以降、「ナー ज्याの村」「アレクセイと泉」、最近作の「アラヤシキの住人たち」など映画も手がけ、監督としても高い評価を受けている。いずれもスチール写真がそのまま動き出したような映画だ。そこには国境はない。あるのは人間讃歌だ。

数年前、「ナー ज्याの村」を石垣島の小さな映画館で上映した時、彼と二人でキップのモギリをしたことがある。今も懐かしく思い出される。なんだか彼の作る映画の一シーンのように。

今回の写真展が、丸木夫妻の沖縄戦の大作が常設される佐喜眞美術館で開かれるのも、何かの因縁であろう。本橋成一の全仕事が俯瞰できる写真展を、この機会にぜひ鑑賞してほしい。

(ジャーナリスト)